

1-4 認知症患者をケアする看護師の感情 —問題行動出現原因のタイプ分類を理解した上での関わりを通して—

○ 高橋 誓、木下 大輔、春井 ひとみ、高橋 麻由
諏訪部 純子、小林 佐衛子 (IHI 播磨病院)

I. はじめに

高齢化が進んでいる日本では、全人口に占める65歳以上の人口が20%を超えている。中でも認知症高齢者は2015年には250万人になると予測され、社会問題として深刻な状況になると考えられる。当院の入院患者においても認知症患者は年々増えており、看護師は行動・言動に対しネガティブな感情を抱き、苦痛を感じながらケアしている現状がある。認知症患者をケアする看護師の思いに関する研究は多く報告されているが、認知症の問題行動の原因を理解した上での看護師の感情についての研究は見当たらなかった。そこで、介護の場面で活用されている問題行動出現原因のタイプ分類を理解し関わることで、個別性を活かした看護が提供できるのではないかと考え、研究に取り組んだ。

II. 研究方法

1. 研究対象 : 各病棟看護師、透析室看護師（認知症による問題行動出現時の対応の看護計画を挙げ、実施できた看護師21名）
2. 研究期間 : H23年8月1日～10月30日
3. 研究方法 : 問題行動原因タイプ分類のアセスメントシート、タイプ分類別看護計画を作成し、問題行動原因タイプ分類について対象看護師に説明した。アセスメントシートと看護計画を用いて看護実践し、H23年10月に認知症患者への関わりができた看護師に質問紙法(無記名自由記述方式)で調査を行い、その結果をKJ法で分類し、分析した。
4. 倫理的配慮 : 対象者に研究目的、意義、調査の必要性、自由意思に基づく調査の回答、回答しないことによる不利益は生じないなどの倫理的配慮を口頭と書面で説明し、同意を得た。また所属施設の倫理委員会において承認を得た。

III. 結果

「認知症ケアが苦痛である」と答えた人は81%であった。苦痛と思う場面として「理解してもらえない」「安静が守れない」「同じことの繰り返し」があげられた。その時の感情は「焦燥感」「どうしたらいいかわからない」「業務が進まない」「対応に困った」であった。看護を実践していく上での要望としては、「精神面へのサポート」「専門的なサポート」があげられた。「問題行動出現原因のタイプ分類で関わることで感情の変化については「変化があった」42.9%、「変化がなかった」57.1%であった。変化の内容は「不安が軽減した」「認知症を理解して関わられた」「優しくなれた」「患者に変化があった」であった。感情の変化の要因は「認知症を理解した」「タイプ別対応を理解した」「予測して対応できた」「自分の感情が整理できた」であった。また、変化がなかった理由は「認知症を理解していた」「タイプ分類が理解できなかった」であった。

IV. 結論

1. 認知症の問題行動の原因を理解することで、看護師が認知症患者の思いを受け入れられた。
2. 専門的知識を習得したことで、自分の行動、言動を振り返ることができるようになった。
3. 認知症患者に、予測して対応ができ、個別性を活かした看護に繋がった。